

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	武 田 裕 司
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
学習者の自己内対話を促す文学的文章の読みの学習指導に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	山 元 隆 春	
審査委員	教 授	田 中 宏 幸	
審査委員	教 授	難 波 博 孝	
審査委員	教 授	間 瀬 茂 夫	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、文学的文章の読みの指導の重要な目標である「自立した読者」育成のために、学習者の「自己内対話」を促す学習指導のありようを理論的かつ実証的に探究した研究であり、著者・作品・登場人物との対話や教師・友人との対話を通して学習者が営む、自己省察・自己発見の重要性を明らかにしようとした研究である。</p> <p>本論文は、序章（研究の目的と方法）、第1章（文学的文章の学習指導研究における「自己」の取り扱われ方）、第2章（文学的文章の学習指導における「自立した読者」概念の再検討）、第3章（文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」）、第4章（文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」を用いた教材分析）、第5章（学習者の自己内対話過程の検討）、第6章（学習者の自己内対話を促進するための学習指導）、終章（研究の総括と展望）から構成されている。</p> <p>序章には、文学的文章の読みの学習指導で自己内対話を促すことを研究対象として取り上げる目的と研究方法が述べられ、①「自立した読者」概念の再検討、②文学的文章の読みにおける「自己内対話」過程の解明、③文学的文章の読みの学習における学習者の「自己内対話」を促進する指導法の解明、という三つの研究課題が提示されている。</p> <p>第1章では、文学的文章の読みの学習指導研究と授業実践が、目標と指導方法の観点から検討されている。心理学お呼び文学的文章の読みの学習指導研究における目標論において、学習者の「自己」がどのように捉えられたかということを整理・検討し、授業実践における学習者の「自己」の扱われ方が詳細に分析され、あわせて従来の文学的文章の読みの学習指導研究の成果と課題が明らかにされている。</p> <p>第2章では、文学的文章指導の目標としての「自立した読者」概念が多角的に検討されている。現代社会における「自立した読者」の条件や、「自立した読者」の育成に果たす文学的文章学習指導の価値と役割が明らかにされた。</p> <p>第3章では、読者の「自己内対話」の過程を明らかにするため、心理学領域の研究者ハーマンスらの「対話的自己論」を批判的に検討しながら、この論の価値を見極めつつ、文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」が提案され、このモデルの有効性を検証するための二つの観点が設定された。</p>			

第4章及び第5章では、第3章で構想・提案された文学的文章の読みにおける「学習者の自己内対話モデル」の有効性が詳細かつ具体的に検討されている。

第4章では、高等学校国語科の代表的な文学的文章教材「羅生門」(芥川龍之介)及び「山月記」(中島敦)を取り上げて、教材分析の観点から「学習者の自己内対話モデル」の有効性が緻密に検証されている。

第5章では、「学習者の自己内対話モデル」の有効性が、実際の学習者の反応の分析にもとづきながら検討されている。小学校中学年・高学年・中学校2年生、高校2年生を対象とした実験授業を実施し、その授業で得られた学習者の反応を丹念に分析した。小学校・中学校での実験授業では「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)を、高校2年生を対象とした実験授業では「ベル・エポック」(絲山秋子)をそれぞれ教材とし、これらの教材に対する学習者の反応を分析して、仮説の検証を行った。

第6章では、前章までに考察してきた学習者の「自己内対話」を促進するための学習指導のあり方が考察されている。文学的文章の読みの価値を「私という存在への追究」にみる立場から、「自己内対話」の重要性を指摘し、それを活性化させる手法として「ナラティブ・アプローチ」を取り上げ、このアプローチを用いた学習指導法の分析を行った。その上で、「藤島さんの来る日」(江國香織)を用いた読者反応調査を実施し、その成果の分析にもつづいて、学習者の「自己内対話」を促進する学習指導を行うための具体的な提言がなされている。

終章では、第1節で研究の成果を総括し、第2節に今後の研究の課題が述べられている。

本論文は、文学的文章の読みの学習指導の基盤となる、学習者の自己内対話の内実とその意義を理論的・実証的な研究を通して明らかにした点に、従来の研究を乗り越える大きな意義を認めることができ、高く評価できるものである。とくに次のような点に本論文の意義と特色が認められる。

(1) 自ら主体的に作品と向き合い、作品を「自己」と関連づけながら「意味づけ」を行うことが「自立した読者」となるための大きな条件の一つであることを論じ、作品を読んで自らを振り返る「自己内対話」の重要性を指摘したこと。

(2) 学習者の「自己内対話」を説明するための理論的枠組みとしてハーマンズらによる「対話的自己論」を多角的に考察しながら「文学的文章の読みにおける読者の自己内対話モデル」を構想し、それが文学的文章教材の分析や学習者の反応分析に関して有効に機能することを具体的かつ実証的に明らかにしたこと。

(3) 学習者の「自己内対話」を活性化するための具体的な学習指導を探り、そのための手法として「ナラティブ・アプローチ」が有効であることを明らかにし、学習者が「自己内対話」を見つめ、振り返りながら、自己省察を通じて自己発見に至ることに、文学的文章を教室で読むことの価値を見て、自らの物語る声(voice)に対して意識的になり、お互いの物語る声を「聴きあう」場をつくり出すことの重要性を指摘したこと。これは、文学的文章の学習指導をなぜ国語科で行うのかという従来の課題に答えるものでもある。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

